人間文化論叢　第8巻　2005年

母親の就労が青年期女子の仕事に対する価値観に及ぼす間接的な影響の検討

松　浦　素　子*

Maternal Employment and Work Values of Young Women: An Indirect Effects Model

MATSUURA Motoko

abstract

The purpose of this study is to examine the relationship between maternal employment and young women's work values, as mediated by egalitarian sex role attitudes, beliefs about the consequences of maternal employment for children. A questionnaire survey was carried out using a mailed questionnaire, and 296 female undergraduates completed (average age 21.75 years). Women asked to answer questions regarding to the importance of work values, scale of egalitarian of sex role attitudes, beliefs about the consequences of maternal employment for children scale, and career pattern of their mothers.

The results of structural equation modeling indicated that maternal career pattern had positive effect to the importance of work values directly. In addition, beliefs about the benefits of working mother to children mediated the relationships between maternal career pattern and the importance of work values. On the other hand, no significant relationships between beliefs about the benefits of nonworking mother to children and the importance of work values and maternal employment and the level of egalitarian sex role attitudes were found. However, maternal career pattern led to less beliefs about the benefits of nonworking mother, beliefs about the benefits of nonworking mother was related to higher score of work values mediated by the level of egalitarian sex role attitudes.

Key words : work values, young adult women, maternal employment

問　題

青年期において、職業生活の準備や選択は重要な課題である。しかし近年、学校から職場への移行期におけるフリーターの存在や、就業も在学もしていないニート（NEET: Not in Employment, Education or Training）の存在が社会問題となるなど、青年期の職業意識に注目が集まっている。浦上（2005）は、こうした問題が、労働政策上の問題を超え、キャリア形成や生き方といった点からも重要な検討課題であることを示唆している。

2004年1月には“キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力会議報告書―児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために―”が発表され、この中でキャリア教育が求められる背景として、就職・職業をめぐる環境の激変という問題だけでなく、若者自身の勤労観や職業観の未熟さといった課題を指摘している。

こうした青年期における社会化のプロセスの中で、仕事に対する価値観（work values）は、就労行動に影響

キーワード：仕事に対する価値観、青年期女子、母親の就労

＊平成15年度生　人間発達科学専攻

を及ぼす重要な要因として検討されてきた（Super,1970; Zytowski, 1970; Ben-Shem & AviItzhak, 1991; 森永 ,1994）。先行研究では仕事に対する価値観が、職業選択や職務満足感と深く関連することが明らかになっており（Katzell, 1964; 森永 , 1997）、達成思考や動機付けにも不可欠な要因であることが示されている。また仕事に対する価値観には、性差があることが数多くの研究によって報告されている（Abu-Saad & Isralowitz, 1997; Cooper, Arkkelin, & Tiebert, 1994; Mason, 1994; Rowe & Sinzek, 1995）。例えば就労前の学生を対象とした研究では、男子学生は女子学生よりも昇進や収入という側面を重要視しており（Beutell & Brenner, 1986; Zytowski, 1970）、女子学生は、男子学生よりも知的刺激や達成感という側面に価値をおいているという結果が得られている（Beutell & Brenner, 1986; Machung, 1989）。また、家族を配慮できるということや、仕事を通して他者を助けるという社会的貢献ができるということに関しても、女子学生のほうが高い価値をおいていることが示されている（Beutell & Brenner, 1986; Bridges, 1990; 森永 , 1994）。

では一体、こうした仕事に対する価値観の形成や性差にはどのような要因が関連してくるのであろうか。先行研究では、母親の就労や母親の就労が子どもの性別化や職業選択に及ぼす直接的な影響が中心的に検討されてきており、母親が働いていると、思春期以降の子どもの性役割に対する平等意識が高く、職業達成思考が高いことや（Montemayor & Clayton, 1983）、こうした関連は息子よりも娘に顕著であることが報告されている（Stephan & Corder, 1985; Chandler, Sawicki & Stryffeler, 1981）。そこで本研究では、母親の就労と仕事に対する価値観との関連に、性役割の平等観がどのような役割を果たすのかについても検討していくこととする。一方で、働いている母親の就労満足感が高いと、娘の職業についての計画性が高くなること（D'Amicot et al., 1983）や、母親が専業主婦であることに不満を持っている場合にも女子大学生の娘のキャリア志向が高かったという報告（Altman & Grossman, 1977）があり、母親の就労の直接的な影響だけでなく、母親自身の就労者としての主観的な満足感や、子どもの側が母親の就労をどうとらえているのかといった間接的な媒介要因の影響も明らかになっている（Lerner & Galambos, 1985; D'Amico, Haurin, & Mott, 1983）。そこで本研究では青年期の女子に焦点をあて、母親の就労がどのようなメカニズムで子どもの側の仕事に対する価値観に影響するのかについて、母親の就労の有無という直接的な要因だけではなく、子どもの側の質的な媒介要因についても検討していくこととする。媒介要因としては、性役割に対する平等意識と母親の就労が子どもの発達に及ぼす影響についての意識を取り上げる。さらに我が国における女性の労働力率の年齢分布は、25 歳から 35 歳の育児期を底とする M 字型曲線の特徴を持ち、パートタイムなどで復職することが最も多い（総務庁 , 1997）。そこで本研究では、母親の就労についても、就労の有無だけでなく、復職した時期についても検討を行う。

以上より、本研究では青年期女子の仕事に対する価値観と母親の就労との関連について、直接の影響だけでなく、母親の就労に対する態度や性役割平等意識を媒介とした間接的な影響について検討することを目的とした。構造方程式モデルを用いた分析から、これらの概念がいかなる関係にあるのかを検討する。

方　法

調査対象者

2005 年 3 月に短期大学及び大学を卒業予定の短期大学、大学に通う女子学生 296 名。平均年齢 21.75 歳（SD=1.46）であった。

調査時期と手続き

2004 年 11 月から 2005 年 2 月に実施された。授業の開始前もしくは終了後の時間に調査の依頼と質問紙の配布を行い、郵送にて回収した。回収率は、29.6% であった。

調査内容

母親のキャリアパターン

対象者の母親の最終学歴以降のキャリアパターンは、(a)「最終学歴を卒業してから、ずっと常勤職やパートなどの非常勤職を続けている」が 17.1%、(b)「一時仕事を辞めて家にいた時期があったが、今は常勤職やパートな

ど非常勤職についている」が44.5%、(c)「あなたが生まれた後、仕事をしていた時期があったが、今はしていない」が12.2%、(d)「あなたが生まれた後は、一度も仕事についたことはない」が26.3%であった。

さらに、一時離職し復職した(b)と(c)の群については、復職の時期を尋ねた。対象者が「就学前に復職」が18.1%、「小学生の時」が17.4%、「中学生以降」が21.2%であった。そこで、母親のキャリアパターンを5つのグループに分類した（Table1）

Table 1　母親のキャリアパターン（N＝293）

区分	人数	%
1. 専業主婦	77	26.3
2. 中学生以降で復職	62	21.2
3. 小学生の時に復職	51	17.4
4. 就学前に復職	53	18.1
5. 継続	50	17.1

性役割意識を測定する項目

平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）（15項目）を使用（鈴木, 1991;1994）。5件法で回答を求め、項目の合計得点を尺度得点（15点から75点）とした。得点が高いほど性役割に平等志向的な態度を有し、得点が低いほど伝統思考的な態度を有していることが示される（鈴木, 1996）。尺度の信頼性係数は、α =.86であった。なお本尺度で測定する平等は、結婚、教育、子育て、職業において、個人が家族の範囲内で男女の平等を達成することが可能な“個人レベルにおける男女平等”である（鈴木, 1996）。

仕事に対する価値観

福丸・無藤・飯長（1999）によって作成された仕事観尺度（22項目）の一部を用いた。仕事が自分の中で、どのくらい重要で価値をもつものと捉えているのかを調べるため、仕事観尺度の4因子の中から、“充実・自己実現”及び“仕事中心”の2因子を選んだ上で、6項目の質問項目を使用した。4件法で回答を求めた。主成分分析を行った結果、一次元構造であることを確認し（Table2）、6項目の合計得点を尺度得点とした。得点が高いほど、仕事に対して高い価値を置いていることが示される。仕事観尺度は、仕事観が仕事の意味付けを問うもので、実際の満足感とは異なり、就業中でなくても回答可能な質問項目から作成されている（福丸他, 1999）ことから、本調査の対象者である未就労の学生にも回答が可能であると考えた。信頼性係数は、α =.72であった。

Table 2　仕事に対する価値観の主成分分析

項目	因子負荷量
仕事は自己実現の場である	.76
仕事は人生に充実感をもたらす	.73
自分にとって仕事はあまり大きな価値をもたない*	.69
仕事を通して自分が成長する	.64
自分にとって何より大切なのは仕事である	.56
家庭のことより仕事を優先させたい	.50
説明率	42.68%

注)*項目は逆転項目

母親の就労に対する態度尺度

Greenberger,Goldberg,Crawford,Granger（1988）によって作成されたBACMEC（Beliefs about the Consequences of Maternal Employment for Children）（24項目）の一部を用いた。BACMECは、母親の就労が子どもに及ぼす影響について、利点（benefit）（13項目）と犠牲（cost）（11項目）の両面から測定している。本調査では、それぞれの項目から3項目ずつを使用し、“ぜんぜんそう思わない（1点）”から“まったくその通りだと思う（5点）”の5件法で回答を求めた。この尺度を因子分析した結果（Table3）、2因子構造が確認された。以降の分析では、第1因子を“母親の就労肯定感”、第2因子を“母親の専業主婦肯定感”とする。信頼性係数は、

母親の就労肯定感 α =.68、母親の主婦肯定感 α =.66 であった。それぞれの評定値を加算した下位尺度得点を以降の分析に用いた。

Table 3　子ども発達と母親の就労に対する態度尺度の因子分析

項目	因子負荷量
第1因子：母親の就労肯定感	
お母さんが家の外でフルタイム(常勤)で働いている家庭の子どもは、より適応力があり、突然の出来事や予定の変更にも柔軟に対応できる	.77
お母さんが働いている家庭の子どもは、家族の協力やチームワークの大切さについて、たくさんのことを学ぶことができる	.68
お母さんが働いていると、子どもはより自立して、自分で自分のことをすることができるようになる	.52
説明率	31.83%
第2因子：母親の専業主婦肯定感	
お母さんがフルタイム(常勤)で働いていると、子どもは暖かく安定した関係をお母さんと築くことができない	.66
心理的な問題を抱えている子どもは、お母さんが家の外で働いていない家庭より、お母さんが働いている家庭に多い	.64
お母さんが家にいる方が、幼い子どもは多くのことを学ぶことができる	.59
説明率	29.49%

結　果

Table 4　尺度の基本統計量と尺度間の相関

	M	SD	1	2	3	4	5
1. 対象者の学歴	1.24	0.43	1				
2. 母親キャリアパターン	3.22	1.44	.07	1			
3. 仕事に対する価値観	16.99	2.64	-.19***	.17***	1		
4. SESRA-S	57.22	8.71	-.21***	.11	.33***	1	
5. 母親の就労肯定	9.53	2.18	-.01	.15*	.19***	.11	1
6. 母親の専業主婦肯定	8.28	2.44	.10	-.20***	-.24***	-.57***	-.03

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

仕事の価値観に関する因果モデルの検討

はじめに尺度間の相関を算出した（Table4)。なお、これらの尺度間の関係性に、学歴による差異が見られるかを確認するために、対象者を短期大学生（71 名)、大学生（225 名）に群分けし、相関係数を算出した。結果として Table4 と符合が逆転するような大きな相違は認められなかったことから、大きな傾向差はないものと判断し、因果モデルの分析を行うこととした。

次にこれらの変数を用いて、構造方程式を用いた検討を行った。初めに「母親のキャリアパターン」から「仕事に対する価値観」への直接のパスと、「母親の就労肯定感」および「専業主婦肯定感」を媒介するパス、さらに「平等主義的性役割態度スケール（SESRA)」を媒介するパスを引いた。さらに媒介変数である「母親の就労肯定感」、「専業主婦肯定感」並びに「平等主義的性役割態度スケール（SESRA)」の 3 変数については、母親の就労に対する態度と性役割観の平等意識の因果関係の方向性を検討するため相互にパスを引いた（Figure1)。このモデルの

すべてのパス係数を算出し、その後変数間のパス係数が有意（p<.05）ではなかった5つのパス、「母親のキャリアパターン」から「平等主義的性役割態度スケール（SESRA）」、「母親の就労肯定感」から「平等主義的性役割態度スケール（SESRA）」、「平等主義的性役割態度スケール（SESRA）」から「母親の就労肯定感」、「平等主義的性役割態度スケール（SESRA）」から「母親の主婦肯定感」、さらに「母親の主婦肯定感」から「仕事に対する価値観」のパスを削除した。

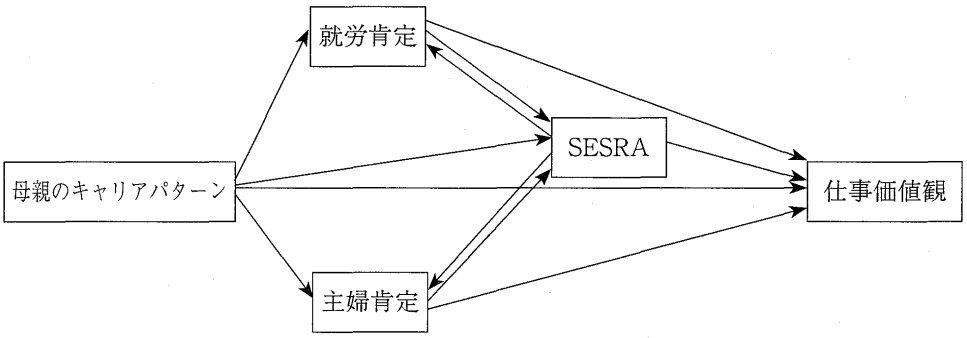

Figure 1　full path model

Figure2に最終的なモデル分析に使用した観測変数とパス係数を示した。分析の結果得られたモデルの適合度指標はGFI=.99,AGFI=.98,RMSEA=.004と、いずれの適合度も想定したモデルがデータの標本共分散行列をよく説明していると判断された。

「仕事に対する価値観」には、「母親のキャリアパターン」から.11の直接のパスと、「母親のキャリアパターン」から「母親の就労肯定感」への.15のパスを媒介した.14のパス、さらに、「母親のキャリアパターン」から-.20の「母親の主婦肯定感」への負のパス及び「母親の主婦肯定感」から-.57の「平等主義的性役割態度スケール（SESRA）」負のパスを経由した.31のパスが示された。

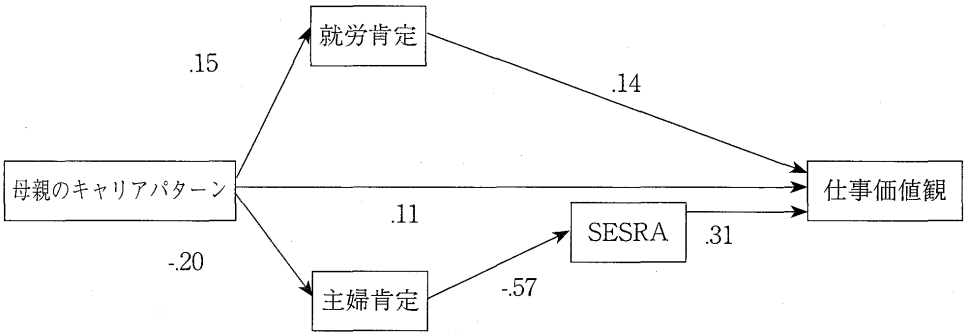

Figure 2　パス解析による最終因果モデル
パス係数はすべてp<.05（GFI=.99, AGFI=.98, RMSEA=.004）

考　察

本研究の目的は青年期女子の仕事に対する価値観への母親の就労の影響について、母親の就労に対する態度が性役割意識に影響し、これらを媒介として間接的に仕事に対する価値観と関連するという仮説について検討することであった。

構造方程式モデルを用いた因果モデルの分析から、自分の母親の就労が早期であるほど、仕事に対して強い価値観を持つことが示され、係数の値は大きくなかったが母親の就労が直接影響を及ぼしていることが明らかになった。また、間接効果の影響としては大変小さいものではあるが、自分の母親の就労が早期であるほど母親の就労が子どもの発達にポジティブな影響を及ぼすと捉えており、このような母親の就労の肯定感が間接的に仕事の価値観を高めることが明らかになった。一方で、母親の就労復帰が遅いほど、母親が専業主婦であることが子ど

もの発達にポジティブに作用すると捉えていることが明らかになり、これらの結果は、自らの養育された環境や母親のキャリア選択を肯定する結果であると解釈することができよう。

また、多くの研究で関連が認められていた母親のキャリアパターンと性役割に対する平等主義的態度には直接の関連が認めらなかったが、専業主婦の肯定感を媒介して、平等主義的態度の高さと仕事に対する価値観の高さに関連が示され、部分的に先行研究の結果を支持した。このことから、専業主婦であることが子どもの発達にポジティブに影響すると捉える傾向が強いほど、性役割の平等主義的態度が低くなることが示され、専業主婦を肯定する背景には、母親の就労が子どもの発達に対してデメリットをもたらすのではないかという不安が内包されている可能性を示すとともに、そうした不安が平等主義的な性役割を低め、伝統的な性役割を促進しているものと考えられる。さらに母親の就労を子どもの発達にポジティブに捉える傾向と性役割の平等主義的態度には関連が認められなかったことや、相関係数の分析においても、就労の肯定感と専業主婦の肯定感にはほとんど相関が認められなかったことから、母親の就労の肯定感と専業主婦の肯定感は、相反するものではなく独自のメカニズムを持つことが示唆される。今後、詳細な検討が必要であろう。

最後に本研究の反省点と今後の展望について述べることにする。本研究は、青年期の女子に焦点をあてたため、性差の検討を行っていない。今後、男子学生との比較が必要であろう。また、我が国におけるキャリア教育はようやく緒を端したばかりである。本研究では、未入職者である卒業前の学生の仕事に対する価値観を検討したが、これらの価値観が、実際の職業場面において変容することもあると考えられる。また、青年期から成人期にかけての移行に際し、仕事に対する価値観は重要な変数であることが知られている。このようなことを明らかにするためには縦断的な実証研究の積み重ねが必要であろう。

引用文献

Abu-saad, I. ,& Isralowitz, R.E. (1997) Gender as a Determinant of Work Values Among University Students in Israel. *Journal of Social Psychology* 137, :6,749-763.

Altman, S.L.,& Grossman, F.K. (1977) Women's career olans and maternal employment. *Psychology of Women Quarterly* 1, 365-376.

Ben-Shem, I.,& Avi-Itzhak, T.E. (1991) On work values and career choice in freshmen students: The case of helping vs. other proffessions. *Journal of Vocational Behavior* 39, 369-379.

Beutell, N.J.,& Brenner, O.C. (1986) Sex differences in wrk values. *Journal of Vocational Behavior* 28, 29-41.

Bridges, J.S. (1989) An examination of race and sex differences in managerial work values. *Sex Roles* 20, 205-211.

Chandler, T.A., Sawicki, R.F. & Stryffeler, J.M. (1981) Relationship between adolescent sexual stereotypes and working mathers. *Journal of Early Adolescence* 1, 72-83.

Cooper, S.E., Arkkerin, D.L. & Tiebert, M.J. (1994) Work-relationship values and gender role differences in relation to career-marriage aspirations. *Journal of Counseling and Development* 73, 63-68.

D'Amico R.J., Haurin R.J.,& Mott F.L. 1983 The effect of mothers employment on adoloscent and early adult outcomes of young men and women Children of working parents: Experiences and outcomes Edited by Hayes C.D. and Kamerman S.B. pp 130-219. Naitional Academy Press, Washington,DC.

福丸由佳 (2000) 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連。*家族心理学研究* 14, :2,151-162.

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力会議 2004 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力会議報告書―児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために― (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002.htm)

ゴットフライド A.E. & ゴットフライド A.W. (著) . 佐々木保行 (監訳) . 1996 母親の就労と子どもの発達 : 縦断的研究 . ブレーン出版。

Greeberger, E., Goldberg, W.A., Crawford, T.J. & Granger, J. (1988) Beliefs about the consequences of maternal employment for children. *Psychology of Women Quarterly* 12, 35-59.

Lerner, J.V.,& Galambos, N.L. (1985) Maternal role satisfaction, mother-cahild interaction, and child temperament: A process model. *Developmental Psychology* 21, 1157-1164.

Low, J.M.,& Bailey, K.A. (1990) A comparion of vocational identity formation in older and younger women undergraduates. *College Student Journal* 24, :2,189-195.

Machung, A. (1989) Talking career and family expectations of Berkeley seniors. *Feminist Studies* 15, 35-58.

Mason, E.S. (1994) Work values: A gender comprison and implications for practice. *Psychological Reports* 74, 415-418.

Montemayor, R.,& Clayton, M.D. (1983) Marternal employment and adoloescent development. *Theory Into Practice* 22, 112-118.

森永康子 (1994) 男女大学生の仕事に関する価値観。*社会心理学研究* 9, 97-104。

森永康子 (1997) 大卒・短大卒女性の仕事に関する価値観。*教育心理学研究* 45, 166-172。

Pearson, H.M., & Kahn, S.E. (1989) Women clerical workes: Sex-role socialization, Work attitudes, and valures. *Career Development Quarterly* 37, 249-256.

Rowe, R., & Snizwk, W.E. (1995) Gender differences in work values: Perpetuating the myth. *Work and Occupations* 22, 215-229.

Stephan, C.W., & Corder, J. (1985) The efects of dual-career families on adolescents sex-role attitudes, work and family plans, and choices of important others. *Journal of Marriage and the Family* 47, 921-929.

Super D.E. 1970 Manual: Work values inventory Houghton Mifflin, Boston, MA.

鈴木淳子 (1991) 平等主義的性役割態度―SESRA (英語版) の信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較―. *社会心理学研究* 6, 80-87。

鈴木淳子 (1994) 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成。*心理学研究* 65, 34-41。

鈴木淳子 (1996) 若年女性の平等主義的性役割態度と就労との関係について ―就労経験および理想の仕事キャリア・昇進パターン―。*社会心理学研究* 11, :3,149-158。

総務庁 (2000) 就業構造基本調査 。

浦上昌則 (2005) キャリア関係研究の動向。*教育心理学年報* 44, 47-56。

Zytowski, D.G. (1970) The concept of work values. *Vocational Guidance Quarterly* 18, 176-186.

付記：本研究は、お茶の水女子大学21世紀COE (「誕生から死までの人間発達科学」) 2004年度公募採択研究の助成を受け実施された。

(2006年1月10日受理)